

ネット 漂流

狙われた子どもたち

Vol.57



子どもたちはどこに居る

NET情報技術推進ネットワーク株式会社
篠原嘉一（しのはら・かいち）

聞く。なぜ、みんなは私を理解してくれないのか
悩み、ネットで質問すると同じ経験を待つ友達
が何人も見つかる。居心地のいい居場所をネット
の中に見つけ出すと、なかなか離れられなくなっ
てしまう。

ネットが生活の一部となり、必要不可欠な存
在となった今、避けては通れないが、幼い子ども
が検索して自分で判断し出すことを大人は想定
していないかも知れない。

人権教育に関わってきた人たちが、ネット上の
差別発言やヘイトスピーチを目にすると、これま
で培ってきた経験をもとに、良い悪いの判断をさ
れると思うが、差別発言に「いいね」が8割も付
くと、この意見が正しいと判断する子どもたちも
いるのだ。判断基準がネットの評価で、学校での
学習ではなくなりだした。

新聞やテレビの報道番組を見たこともなく、
ネットニュースが中心の生活になると、フエイクニ
ュースも目にする機会が増え、うのみにしてしま
うと判断を誤りかねない。

社会経験のある大人が見るネットニュースと子
どもが見るネットニュースでは捉え方が違う。アナ
ログな経験なしに、ネットやデジタル、AIを体
験すると判断基準は違ってくる。

学校で人との付き合い方や、不便さを体験す
るからこそ、デジタルやAIを使いこなす人材を
育てることにつながるが、幼児期からデジタル環
境が先行してしまつと、これまでの常識が通じ
なくなる。

今まで無かった環境が子どもたちの身の回り
に整いだした。社会の中にこの環境に適した指
導基準もない。未知の世界が日々広まり続けて
いるのだ。

30年度のネット環境は、テレビを使いネット
で動画サイトを見る児童が増えている点が目立
った。これまでは、スマホさえ持たせなければト
ラブルに遭わないと考える保護者も多かったが、
Wi-Fi環境が整うにつれ、ゲーム機やテレビ
までネットに対応できるようになったため、わざ
わざ小さな画面を見なくても大画面で動画が
見られ、わからないことは音声で検索できるよう
になったことで、低年齢化し幼児まで使えるネッ
ト環境となつてしまった。

この環境の変化が幼児期の子どもに影響しだ
した。今まで幼い子どもはネットをしないと大人
は思っていた。しかし、幼い子どもでもユーチュ
ーブで好きな画像を音声検索で探し出せる。そし
て、好きか嫌いかで、見るか見ないかを判断して
いる。これまでは、親が教える事や、学校で習う
事が基本となり、判断基準ができてきたと思っ
たが、就学前から、自分の判断で好きか嫌いかを
選択する習慣が身についてしまったのだ。友達も
「好きか嫌いか」、勉強も「好きか嫌いか」……
何事も自分で判断する。この習慣がネット依存

の傾向にある児童に多い特徴だ。集団行動に馴
染めない子どもも、自分の判断で今日は学校に
行かない、今日は体操しない、と自分で決めてし
まう。「なぜ学校に行かないといけないのか？」と
疑問に思うとネットで音声検索するといろいろ
な意見が見えてくる。あらゆる方向からの意見
を目にし、行かない選択もあるんだと安易に考
えてしまつようだ。

学校と家を行き来する生活から、ネットの世
界から、自宅や学校に行き来するような感覚に
なつている。基本的な居場所は家庭でも学校で
もない。ネットの中に居る児童が増えてきてい
るよう思う。

この環境を理解していないと、いじめで登校し
なくなつたと勘違いしやすい。いくら学校に相談
してもいじめの事実も見つからず原因がわからな
い。しかし、案外ネットが影響していることが多
いのだ。「ゲームの話をして友達にわかつてく
れない」「友達の知らないことを教えてあげると
嫌われた」「ユーチューブに投稿すると友達から
かたてくるから嫌だ」という話を小学生からよく